

【自由研究発表第2セッション 12月7日 9:45-10:20 C会場 632教室】

## ラオス山村における労働交換 不参加世帯の実状

福島 直樹

(京都大学 CSEAS 連携研究員)

作物や家畜の生産過程は、生育過程に従い労働を多く必要とする時期と、労働とほとんど無関係に作物や家畜の生育する時期があり、季節性と適期性が生じる。季節性は作目の組合せなどにより緩和できるが、適期性が重視される植付けや収穫は労働需要が一時に集中する農繁期が形成される。そのため東南アジアにおいても焼畑の収穫作業や水稲作の移植作業に労力を相互交換する労働慣行（労働交換）のあることが報告されてきた。本発表では、ラオス北部フアパン県L村（全71世帯）を対象に調査した結果を報告する。

調査の結果、水稲作では、多くの場合、親族関係にある3~4世帯が労働交換を利用して移植作業を実施していた（図1）。一方で、約25%の世帯は労働交換をほとんど利用していないことが分かった。不参加の理由は大別すると2つあった。①労働交換が不要な場合（世帯内に十分な労働力を有する、コメ不足に際しても市場から購入できるような経済力を有する等）と、②労働交換への参加に障壁のある場合（労働力を他世帯に提供する余裕がない、村内で交際が少ない等）だった。これが要因となり、労働交換の不参加世帯は結果として2極化し、村内における経済的上層と下層に偏在したと考えられる。

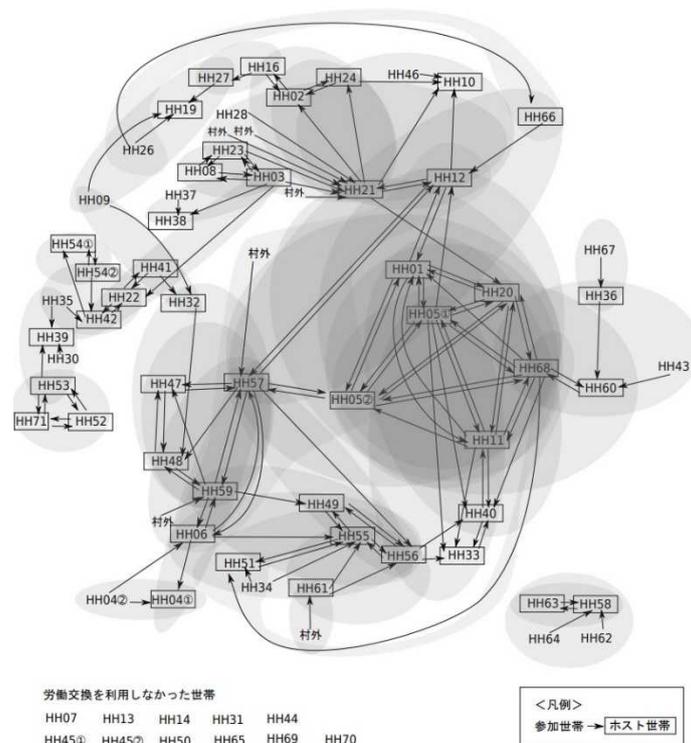


図1 労働交換の宿主世帯と参加世帯、および不参加世帯（水稲作）

【自由研究発表第2セッション 12月7日 10:25-11:00 C会場 632教室】

## 現代フィリピンにおける社会的リアリズムの実践と美学

アート・アクティビズムを事例として

丹羽 理

(京都大学・博士課程)

本発表では、フィリピンのアート・アクティビズムを事例として、フィリピン独自の芸術様式である社会的リアリズム (Social Realism) の実践と美学を検討する。フィリピンの社会的リアリズムは、旧ソ連の社会主義リアリズム (Socialist Realism) と同じように、「革命」に寄与する芸術様式である。しかし、国家主導で推進された後者とは異なり、前者は草の根から生まれ、展開されてきたといえる。社会的リアリズムはフィリピンの美術史において近年、その再評価が行われつつある。しかしそこでは展示・収集という観点からの視覚芸術への偏重が見られる。これに対し、社会的リアリズムは美学ではなく実践であるという批判的な声が聞かれる。その本質は「何世紀にもわたる植民地主義を通して培われた反体制的な文化的想像力」[Flores 2013:64]と、その具体化 (実践) にあり、従来の芸術というカテゴリーに還元し得るものではないのである。では、それはいかなるものか。発表ではまず、社会的リアリズムの歴史を概観する。それは、国民民主運動 (The National Democratic Movement、以下ND) という、民衆革命を通じたフィリピンの独立と民主化を目指す社会運動の文脈でよりよく理解される[Guillermo 2001]。NDはアメリカ植民地主義への反発のなかで、マルクス-レーニン主義・毛沢東思想の影響を受けながら発展してきた。1969年から1986年代にかけてのマルコス元大統領の独裁時代、NDは大きな盛り上がりを見せ、ピープルパワー革命にも貫入していくその運動には多くのアーティストが参加した。その時期、社会運動と深く結びつきながら試行錯誤された芸術が、社会的リアリズムである。そこにはまた、西洋の形式や美学とは異なる、ナショナル・アイデンティティの探求という課題も賭けられてきたといえよう。発表では次に、現代において社会的リアリズムがいかに継承されているかを検討する。Tambisan sa Sining (Interaction in Art) は1979年に設立されたNDに連なる団体である。メンバー数は200人ほど、その多くは十代・二十代の若者である。今日、マニラ首都圏で盛り上がりを見せるアート・アクティビズムのシーンで存在感を示す彼ら・彼女らの実践は、社会的リアリズムに大きな影響を受けている。結論を言えば、その実践はデモ・動員・組織化といった持続的かつ集団的な社会運動そのものである。確かに、アーティストやその作品は運動の創造性と批評性を支える重要なアクターであるが、運動から切り出されて自律した価値を持つことは目指されていない。彼ら・彼女らの芸術は運動の内部において規定され、また意味をもつのである。このような芸術の (再) 概念化に、社会的リアリズムの美学が見出されよう。

<参考文献>

Guillermo, Alice G. 2001. *Protest/Revolutionary Art in the Philippines 1970-1990*, Manila: University of the Philippines Press.

Flores, Patrick D. 2013. 'Social Realism: The Turns of a Term in the Philippines.' *Afterall: A Journal of Art, Context, and Enquiry*. 34. 62-75.

【自由研究発表第2セッション 12月7日 11:05-11:40 C会場 632教室】

「死者への供物 *Pati Kaa Ata Mata*」

インドネシア・フローレス島の人々は前代未聞の出来事とどのように折り合いをつけているか

青木 恵理子  
(龍谷大学研究員)

インドネシア・フローレス島中部山岳地帯リオ語圏地域社会は多数の儀礼共同体からなる。この地域全体を覆うような権威構造は見られない。個人は一つまたは複数の儀礼共同体に寄与／帰属している。彼らは西洋近代的な民主主義や自治とは異なる原理に基づき、平等で自律的な社会生活を営んできた。

これまで、植民地政府（オランダ、日本）、カトリック教会、国家（インドネシア）など西洋近代的な外部勢力との関係のなかで様々な変化がみられたが、平等で自律性の高い地域社会のありかたは保たれ、外部勢力に従属するということは見られなかった。その大きな要因は、外部勢力にとってこの地が政治経済的に価値をもたなかった、外部勢力の継続的な欲望の対象にならなかったことであるともいえる。

しかし、この約10年の間、外部勢力に起因する前代未聞の出来事、が生じている。それらは、外部勢力がこの地に経済的価値を見出したことと深く関係し、地域社会の平等性と自律性を組み変えてしまう可能性を孕んでいる。本発表では、*tana*（土地・大地・土・世界）に関係する以下の4つの前代未聞の出来事に注目する。なぜなら、*tana*は、この地域の人々にとって、最も重要な生産手段であるだけでなく、様々な儀礼が捧げられる神霊的存在であり、*tana*神霊との関係では人間の近代的主体は成り立たないからだ。

第一の出来事は、資本主義市場の欲望が齎した工業生産食物特に食用油の摂取に相関する（と思われる）脳溢血・心臓発作による突然死、それに伴う農作業中の死である。最近の突然死、特に田畑での突然死は人々を不安にさせるが、その災いは儀礼リーダーたちによる儀礼で *tana* から取り払われる。第二の出来事は、農業生産向上のための行政予算による農道の開発である。この場合にも必ず儀礼リーダーたちにより *tana* に許しが請われる。第三の出来事は、国立公園としての広大な土地の国家による囲い込みである。国立公園化のプロセスでは関係する儀礼村の儀礼リーダーたちが政府によって招かれ儀礼を執り行った。毎年8月14日には国立公園内の「死者の終着地」に対し「死者への供物」が儀礼リーダーたちによって捧げられる。しかしこれらの儀礼は国立公園行政によってお膳立てされ、8月17日に同地で行われるインドネシア独立記念式典に包摂される。第四の出来事は、国立公園と隣接するソコリア地熱発電工場 SGI の建設操業である。SGI はシンガポール資本企業 Orka による。SGI の周辺の地形は険しく資材の搬入には国立公園内に建設した道路を使う。自然保護を謳う国立公園設置は自然の開発を謳う、そこに必ず大規模な破壊が伴う、地熱発電工場建設操業と抱き合わせになっている。

国立公園設置と地熱発電工場建設操業を支えるのは、近代的主体としての人間とその行為の対象としての土地であるという知だ。このような状況は、この地域の人々にとって、初めての植民地化体験とも言え、人々は未曾有の苦戦を強いられていると言える。